

『癩患者の告白』を読む－2

後藤 隆

Content Analysis of Leper Confessions (1923)-2

Takashi Goto

Abstract: This paper analyses one paragraph of no.2 case in Leper Confessions(1923). From Morphographic Analysis and KWIC:Key Word In Context Analysis of this case,the various characters, episodes focusing on personal, social and physiological aversion about leper lead to the harsh 'real' images of no.2 leper and his family life, including economic collapse,homelessness, hopeless wandering, suicide, desperation, social isolation, family breakup. And this harsh 'real' confession expression style is extended to a plausible nation's, human beings' 'enemy' story.

Key Words: Leper Confessions, quantitative content analysis, the harsh 'real' expression style and story

要旨: 本稿は、『癩患者の告白』(1923)の概要を扱った「『癩患者の告白』を読む」(第63集、2016)に続いて、所収連番2の告白の「緒言」パラグラフを計量テキスト分析にかけ、その、多種の、登場人物、個別特定場面から「世間」一般までを覆うエピソード、生理的忌避感の強調等の告白スタイルの下、過酷でネガティブな「癩病」「患者」観がストーリー化されていることを、可視化された形で明らかにした。

キーワード: 『癩患者の告白』、計量テキスト分析、告白のスタイルとストーリー

『癩患者の告白』を読む－2

後藤 隆

はじめに

本稿は、「『癩患者の告白』を読む」(②)に続き、同じく『癩患者の告白』(①)を対象に、その読解のためのもうひとつの準備作業にあてられる。

最初の読解準備作業である「『癩患者の告白』を読む」からは、内務省衛生局が1921年に「各道府県立療養所長に對して徴し」1923年に発表した(②、172)、106名の患者の告白を収めた『癩患者の告白』について、次の1)～6)の知見を得ている。

- 1) 『癩患者の告白』前後には、わが国のハンセン病対策をめぐって、国立療養所への患者收容及び收容後の患者への「断種」「監禁」さえ可能ならしめた「隔離」ベクトルと、群馬県「草津湯の沢ハンセン病自由療養地」を典例とする患者による自治的な生活集団をめざした「自由療養地」ベクトルとがせめぎ合っていたこと(②、「2. 『癩患者の告白』前後の関連法の動向」「3. 『癩患者の告白』前後の関連調査の特徴」)¹⁾
- 2) 『癩患者の告白』106名の告白中、男の患者の告白数が女のそれよりも多く、また告白の行数についてもそうであること、男女問わず告白者間の行数差が大きいこと、年齢が10代の告白数、告白の行数とも少ないこと(②、47-48)
- 3) 「私は」「余は」等、告白の主語を告白者としているものが多いが、「涙ながらに語りけり」等告白者の他に録取者の存在をうかがわせるものもあること(②、48)
- 4) 「其一言余の耳には百雷一時に轟くが如く、又全身に冷水を注がれたるが如く、戦慄を覚えたり」等、「文語調の」畳みかけるようなスタイルが共通にみられること(②、48)
- 5) 告白の内容は、「死」「自暴自棄」等発症から收容に到る心身の困難、家族親族等周囲との軋轢、そうした経緯の果ての收容を以て「皇恩」「幸」と評するもの、自身の宗教的な心境、收容生活の改善を訴えるもの、「島」「村」等患者による自治的な将来を願うもの、と、1)の2つのベクトルを含んで多様であり、その意味で「自由」であること(②、49-50)
- 6) 告白の内容は、家族親族、警察を含む行政、医療関係者等を主な登場人物に、告白者自身が忌避するハンセン氏病観、発症～診断確定までの不安、民間療法等の試み、学業職業の頓挫、経済的困窮、放浪、なかなか受け入れられないこともある收容までの経緯、を扱っているという点で、共通するストーリーがみられること(②、48-49)

「『癩患者の告白』を読む」(②)以降、筆者は『癩患者の告白』全文をテキスト・データとして入力し一字一句読み直すことに努めた。この入力読解作業を通じて、4)、6)で指摘した「共通」の「スタイル」、「ストーリー」にあらためて注目し、次の問いを得た。

『癩患者の告白』所収の告白は、5)で指摘したように「多様で」「自由」な側面を示すと同時に、あるスタイル／ストーリーに係留されたものでもあるのではないか。

本稿は、この問いに答えるべく、『癩患者の告白』106名の告白の内告白の行数が100行を越える12ケースの告白のテキスト・データについて、計量テキスト分析による「表層／形式」の特徴把握を手掛かりに、そのスタイル／ストーリーを明らかにしようとするものである。

なお、紙幅の制約のため、12ケースの内、本稿で扱うのは1ケースの1パラグラフに限り、残りは別稿とする。また、そのように限定しても、計量テキスト分析の出力結果は1000行に及ぶ場合があり、掲載を省略したものがある。

本稿での主な引用文献は次の①～④であり、個別の引用については本文中（番号、頁）で表す。①～④以外のものは、本稿末尾の注に示してある。

- ①復刻編集版『近現代日本ハンセン病問題資料集成』、2003年第2刷、不二出版、172-282頁
- ②後藤隆「『癩患者の告白』を読む」、『日本社会事業大学研究紀要』第63集、2016年度、27-51頁
- ③後藤隆「『物語状』質的データ分析——表層／形式から意味への可視化プロセス——」『『物語状』質的データ分析の歴史的展開をふまえたフォーマライズのための基礎的研究』、平成16～18年度科学研究費補助金研究成果報告書、16330107、平成19年6月、研究代表者後藤隆、1-37頁
- ④監修 NTT コミュニケーション科学基礎研究所、池原・宮崎・白井・横尾・中岩・小倉・大山・林 編集『日本語語彙体系 CD-ROM 版』、岩波書店、2008年、第8刷

1. ケース選定と分析技法

まずケース選定について説明する。

<『癩患者の告白』整理表> (②、39-47) から、『癩患者の告白』所収106名の内「少なくとも75%以上が男であり」、「年齢の平均値」33歳（レンジ55）、告白の「行数の平均値」60.1行（レンジ578）であること、また「100行を越える」告白は13名であり、その行数の平均値253.5行（レンジ460）、その13名分を除いた93名の告白の行数の平均値33行（レンジ93）であることがわかっている。(②、47-48)

行数の平均値、レンジを比べると、「100行を越える」13名とそれを除いた93名とでは大きな差がある。

この差は両者の内容の違いにつながってくる。100行に満たない93名の告白中のトピックが限られたものであるのに対し、「100行を越える」13名の告白は、発症から収容までをカバーしたものとなっているからである。

これらから、あくまで有意抽出ではあるが、総行数6368行の『癩患者の告白』全体の今後の分析のステップに位置づけられる読解準備作業にあつて、上述の「スタイル／ストーリー」を明らかにするために、「100行を越える」13名の告白、すなわち所収順に付した連番1、2、3、5、22、30、32、39、41、43、44、45、66 (②、<『癩患者の告白』整理表>) に注目することは適当であろう。ただ、連番1については、九十首を越える、他の告白にはみられない

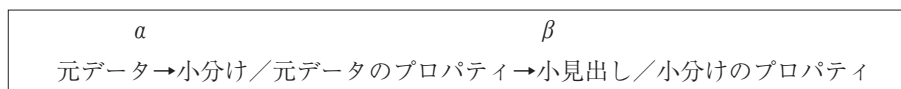
多くの短歌を含んでいることから、外すこととした。

結果、分析ケースとして選定したのは12名の告白であり、その行数の平均値249.2行（レンジ460）、年齢の平均値36.7歳（レンジ13）、すべて男であり、その総行数2990行は、『癩患者の告白』全体の46.6%にあたる。²⁾ なお、既述のように、この内本稿で扱うのは、連番2の1ケースの「緒言」パラグラフである。

次に分析技法である。

『癩患者の告白』所収の告白はいずれも、データ種別としては、尺度化されていないコトバを連ねた文章、すなわち非定型テキスト・データである。非定型テキスト・データは、狭義の質的データであり、その分析には、アフターコーディング、すなわち読み手が分析対象とする非定型テキスト・データ（元データ）を読み取り小分けにした内容ごとに各々を要約する小見出しを付す、元データ→小分け→小見出し、が広く行われている。³⁾ コトバを操るはヒトのなすことであれば、非定型テキスト・データのアフターコーディングは自然のふるまいであろう。ただその際、往々にして、宣伝コピーのようにうまい小見出しの案出に偏し、元データのプロパティが明示されないことがある。（③、10-16）この点には注意を要する。図表1をみてほしい。

図表1 アフターコーディングのプロセス



図表1に模式的に示したアフターコーディングのプロセスは、大きく二つの局面に分かれている。ひとつは、元データ→小分けの局面 α 、もうひとつは、小分け→小見出しの局面 β である。そのいずれにも、プロパティが配してある。局面 α 「元データ→小分け／元データのプロパティ」の「元データのプロパティ」は、元データを小分けにする際にそれを説明する元データの特徴のことであり、具体的には元データに現れる、キーワードやその頻度、字数等を指す。同様に、局面 β 「小分け→小見出し／小分けのプロパティ」の「小分けのプロパティ」は、小分けに小見出しを付す際にそれを説明する小分けの特徴のことであり、小分けに現れるキーワードやその頻度、字数等を指す。プロパティとは、このように、アフターコーディングのプロセスのひとつめの局面「小分け」を説明する先行「元データ」の特徴、そしてふたつめの局面「小見出し」を説明する先行「小分け」の特徴のことであり、これらプロパティを明示することは、アフターコーディングのプロセスを暗箱に陥らせることなく、可視化するための鍵なのである。⁴⁾

本稿の計量テキスト分析は、このプロパティを鍵としたアフターコーディングのプロセスの可視化、を実現する有力な分析技法である。

具体的には、日本語辞書と元データとを対応させ、膠着語である日本語で書かれた元データを形態素解析にかけ出力結果を整理するプログラム「近代茶まめ」⁵⁾、その形態素解析出力結果の語彙を分類する『日本語語彙体系 CD-ROM 版』(④)、元データの中のキーワードの位置等を探し出すための KeyWordInContext プログラム KWIC Finder⁶⁾、を用い、『癩患者の告白』

テキスト・データのプロパティを明らかにしていくことを試みる。

そこから得られる形態素の発音形（読み仮名）やキーワードに前後して現れる先行／後続文脈の情報は、ヒトがコトバを解する際の「意味」ではなくあくまで元データの「表層／形式」の一端を把握する手がかりにすぎない。だがであればこそかえってそれは、筆者にも読者にもいちいち可視化された形で確かめ得る『癩患者の告白』読解のための手がかりたりうるのである。（③、17-29）

2. 計量テキスト分析によるスタイル／ストーリー可視化の手続き：例示

本節では、選定した12ケースの告白の内、本稿で扱う連番2のテキスト・データの「緒言」パラグラフの一部を形態素解析にかけ、本稿が目するスタイル／ストーリーを可視化すべく、そのプロパティを明らかにしていく手続きの例示を、行う。

連番2は、年齢三十五年の男の告白であり、「緒言」「私の発病の第一期」「父子の対面」「喜びと苦しみ」「一家の整理及瓦解」「渡る世間に鬼はなし」「入院と洗禮」「復生病院の創立と沿革」「魔鬼の罟」「失明」「騒動の顛末」「別れの一言」「希望」と各々小題の付された13のパラグラフから成る全585行である。連番2では、この小題ごとの13のパラグラフを以て既に「小分け」がなされているとみなし、各パラグラフのスタイル／ストーリーに係るプロパティを探ることとする。

図表2は、小題「緒言」を除き、「緒言」パラグラフの一部を、例示のため、「近代茶まめ」にかけて得た「書字形」「発音形」「字数」の出力結果である。⁷⁾ なお、出力結果は、概ね適切ではあったが、中には、「忌嫌（われ）」：「イミキラ（われ）」が書字形：「忌嫌」、発音形：「キケン」に、「はあ（る）（まじ）」：「ワアル（まじ）」が書字形：「はあ」、発音形：「ハー」に、「仕事」：シゴトが書字形：「仕」、発音形：「ツカエ」、書字形：「事」、発音形：「コト」に、のように、不適切なものも混じていた。それらについては筆者が修整した。

図表2からは、次のi～viを読み取ることができる。

- i 「何人も」「患者が」「彼等を目撃したる人々の心は」の3者が登場人物であり、「彼等」は「患者」を指している。
- ii 登場人物「何人も」に係って「世間一般に」、 「患者が」に係って「路傍に徘徊するの時」「自宅にあって仕事に従事する時」と、場面が示されている。
- iii 登場人物「何人も」：場面「世間一般に」に係って「恐れざるはなく」「嫌われる」、 「彼等」を目撃したる人々の心は：「路傍に徘徊するの時」「自宅にあって仕事に従事する時」に係って「如何」と、心理状態の描写が示されている。なお、「如何」は図表2中の「品詞」で「副詞可能」とされており、『日本語語彙体系 CD-ROM 版』（④）でも「副詞」としての使用が確認された。その画面を図表3に示しておく。なお、副詞としての「如何」は「どれほど」「どんなに」の意である。（北原保雄編『明鏡国語辞典』第二版、大修館書店、第七刷、2016）
- iv 登場人物「何人も」：場面「世間一般に」：描写「恐れざるはなく」「嫌われる」に係って対象「癩

図表 2 連番 2「緒言」(一部)の形態素解析出力結果

書字形	発音形	字数	品詞				
世間	セケン	3	名詞-普通名詞-一般	況んや	イワンヤ	4	副詞
一般	イッパン	4	名詞-普通名詞-一般	患者	カンジャ	4	名詞-普通名詞-一般
に	ニ	1	助詞-格助詞	が	ガ	1	助詞-格助詞
何人	ナンビト	4	名詞-普通名詞-一般	路傍	ロボー	3	名詞-普通名詞-一般
も	モ	1	助詞-係助詞	に	ニ	1	助詞-格助詞
癩病	ライビョー	5	名詞-普通名詞-一般	徘徊	ハイカイ	4	名詞-普通名詞-サ変可能
を	オ	1	助詞-格助詞	する	スル	2	動詞-非自立可能
恐れ	オンレ	3	動詞-一般	の	ノ	1	助詞-格助詞
ざる	ザル	2	助動詞	時	トキ	2	名詞-普通名詞-副詞可能
は	ワ	1	助詞-係助詞	或は	アルイワ	4	接続詞
なく	ナク	2	形容詞-非自立可能	自宅	ジタク	3	名詞-普通名詞-一般
又	マタ	2	名詞-普通名詞-一般	に	ニ	1	助詞-格助詞
是	コレ	2	代名詞	あつ	アッ	2	動詞-非自立可能
程	ホド	2	助詞-副助詞	て	テ	1	助詞-接続助詞
嫌わ	キラワ	3	動詞-一般	仕事	シゴト	3	動詞-一般
れる	レル	2	助動詞	に	ニ	1	助詞-格助詞
物	モノ	2	名詞-普通名詞-サ変可能	従事	ジュージ	4	名詞-普通名詞-サ変可能
はあ	ハー	2	感動詞-一般	する	スル	2	動詞-非自立可能
る	ル	1	助動詞	の	ノ	1	助詞-格助詞
まじ	マジ	2	助動詞	時	トキ	2	名詞-普通名詞-副詞可能
	。		補助記号-句点	彼	カレ	2	代名詞
只	タダ	2	接続詞	等	ラ	1	接尾辞-名詞的-一般
癩病	ライビョー	5	名詞-普通名詞-一般	を	オ	1	助詞-格助詞
と	ト	1	助詞-格助詞	目撃	モクゲキ	4	名詞-普通名詞-サ変可能
云ふ	イウ	2	動詞-一般	し	シ	1	動詞-非自立可能
文字	モジ	2	名詞-普通名詞-一般	たる	タル	2	助動詞
すら	スラ	2	助詞-副助詞	人々	ヒトビト	4	名詞-普通名詞-一般
忌嫌	イミキラ	4	名詞-普通名詞-サ変可能	の	ノ	1	助詞-格助詞
われ	ワレ	2	代名詞	心	ココロ	3	名詞-普通名詞-サ変可能
ます	マス	2	助動詞	は	ワ	1	助詞-係助詞
	。		補助記号-句点	如何ん	イカン	3	名詞-普通名詞-副詞可能
					。		補助記号-句点

図表 3 『日本語語彙体系 CD-ROM 版』ソフトウェア「こととい Light」画面



病を」が、登場人物「彼等を目撃したる人々の心は」：場面「路傍に徘徊するの時」「自宅にあって仕事に従事する時」：描写「如何」に係って対象「彼等を」（すなわち「患者」を）が示される。これらから、「癩病」やその「患者」は、ネガティブな対象として位置づけられていることがわかる。

v そのネガティブな位置づけを、「癩病と云ふ文字すら」「忌嫌われます」と、「癩病と云ふ文字」にまで、言い及び関連付けている。

vi 「目撃したる人々の心は如何」の字数みると、「目撃したる／人々の／心は如何」と七五七の調子に調えられており、「どれほど」「どんなに」の「如何」を強調する効果が示唆される。⁸⁾

i～viを、図表4の形に整理する。

図表4 連番2「緒言」(一部)の形態素解析出力結果より得られた知見

登場人物	場面	対象	描写	関連
何人も	世間一般に	癩病を	恐れざるはなく、嫌われる	癩病と云ふ文字すら忌嫌われます
患者が	路傍に徘徊するの時、自宅にあって仕事に従事する時	彼等(患者)を		
彼等を目撃したる人々の心は			如何	七五七の調子

図表4は、「対象」とした「癩病」「患者」に係って「登場人物」「場面」「病者」「関連」と、プロパティ間の関係を明らかにしたものとなっている。ここから、「癩病」「患者」を中軸として他のプロパティが配されているとみなせば、「癩病」「患者」を連番2「緒言」(一部)のキーワード候補とすることができよう。そこで、KWIC Finderで「癩病」「患者」をキーワード指定し、先行、後続文脈とともに出力した結果を、図表5に示す。

図表5 連番2「緒言」(一部)のKWIC出力結果

先行文脈	キーワード	後続文脈
世間一般に何人も	癩病	を恐れざるはなく又是程嫌われる物はあるまじ。
只	癩病	と云ふ文字すら忌嫌われます。
況んや	患者	が路傍に徘徊するの時或は自宅にあって仕事に従事するの時彼等を目撃したる人々の心は如何ん。

ここまで、形態素解析(図表2)→登場人物、場面、対象、病者、関連(図表4)→キーワード(図表5)の手続きを例示した。連番2「緒言」(一部)の分析の例示であったが、「はじめに」の4)で指摘しておいた「畳みかける」ようなスタイルや、6)に通じるネガティブなストーリーを裏付けるプロパティを可視化できていることがわかる。

3. 計量テキスト分析によるスタイル／ストーリーの可視化：連番2「緒言」パラグラフ

本節では、前節の形態素解析、KWIC分析によるスタイル／ストーリーの可視化の例示にならって、連番2「緒言」パラグラフ全体の分析を行う。

まず、小題「緒言」を除き、「緒言」パラグラフを「近代茶まめ」にかけて得た「書字形」「発

図表6 連番2「緒言」：登場人物のKWIC出力結果

行番号	先行文脈	キーワード	後続文脈
1		私	の最も嫌いな物が二つある。一つは蛇で一つは癩病患者であり
2	私の最も嫌いな物が二つある。一つは蛇で一つは癩病	患者	であります。両者は私ばかりでなく世人一般から嫌はれて居る。……或日佛
3	つある。一つは蛇で一つは癩病患者であります。両者は	私	ばかりでなく世人一般から嫌はれて居る。……或日佛國王ルドビコ九世が臣下
4	蛇で一つは癩病患者であります。両者は私ばかりでなく	世人	一般から嫌はれて居る。……或日佛國王ルドビコ九世が臣下に向かつて云え
5	……或日佛國王	ルドビコ九世が	臣下に向かつて云え
6	一般から嫌はれて居る。……或日佛國王ルドビコ九世が	臣下	に向かつて云える様大罪を犯すと癩病に かゝるとわ何れが悪しきかと。此間
7	かゝるとわ何れが悪しきかと。此間に答ふて	臣下	は異口同音に然り、癩病なりと。勿論ルドビコは宗 教に熱心なるが故に宗教
8	が故に宗教的感念より此の問ひを發したのであらうが	臣下	は俗人なるを以て普通人情より之れを答へたのであらう。……世間一般
9	に宗教的感念より此の問ひを發したのであらうが臣下は	俗人	なるを以て普通人情より之れを答へたのであらう。……世間ippanに何人
10	り之れを答へたのであらう。……世間一般に	何人	も癩病を恐れざるはなく又は程嫌われる物はあるまし。只癩病と云ふ文字す
11	るまし。只癩病と云ふ文字すら忌嫌われます。況んや	患者	が路傍に徘徊するの時或は自宅にあつて仕事に従事するの時彼等を目撃した
12	事に従事するの時	彼等	を目撃したる人々の心は如何ん。憐れだと思ひましようか、氣の毒だ
13	事に従事するの時彼等を目撃したる	人々	の心は如何ん。憐れだと思ひましようか、氣の毒だと思ひましようか、否
14	思ひましようか、否寧ろ黙探するであらう。……見る	人	に 於て斯如くんば病む其れ自身は何んと感じるであらう。他の病と異つて二年
15	める故に	人	之を名づけて癩癩と稱す。頭は赤げてランプの如く足は落して暨とな
16	に苦しむ。故に	人	は人三化七と誠に適當の譬かと思ふ。……之を醫者に聞くに微菌は内部迄侵
17	。故に人は人三化七と誠に適當の譬かと思ふ。……之を	醫者	に聞くに微菌は内部迄侵入し て居ると云ふ。外部の微菌は誰にも知れる通り
18	て居ると云ふ。外部の微菌は	誰にも	知れる通りであるが其れ自身最も遺憾に堪えないのは麻痺其れ である。
19	も	本人	は一向平氣で他人から云はれて始めて驚くと云事や人參と牛
20	も本人は一向平氣で	他人	から云はれて始めて驚くと云事や人參と牛の嗅い分けがつかぬ人さえあ
21	れて始めて驚くと云事や人參と牛の嗅い分けがつかぬ	人	さえあ 有。専門醫でない限りどうして此の患者の?態が察しられようか。如何
22	る。	専門醫	でない限りどうして此の患者の?態が察しられようか。如何
23	る。専門醫でない限りどうして此の	患者	の?態が察しられようか。如何程細かに書たとて到底人々に了解させ得ると
24	者の?態が察しられようか。如何程細かに書たとて到底	人々	に了解させ得ると云事わ不可能の事と思ふ。或る醫者が此麻痺と云事に付
25	了解させ得ると云事わ不可能の事と思ふ。或る	醫者	が此麻痺と云事に付て學理上でなく實地に知りたいて云て居た處風吹き荒ぶ
26	居た處風吹き荒ぶ冬の或日水門の埃(ゴミ)を佛わんとて	自身	川中に入りたりき。やがて宅に歸り 行きしが餘りの冷さに途中にて下駄の脱
27	がつきさては	患者	の麻痺もと思つたと云。…… 是は單に一例に過ぎない事であるが
28	一、	少年	にして此の病出でんか學問は愚か禮儀作法も知らず家庭夫婦交
29	少年にして此の病出でんか學問は愚か禮儀作法も知らず	家庭	夫婦交際の事柄も知らず徒らに ダメツチとなつて果てるのみ。 二、 青
30	にして此の病出でんか學問は愚か禮儀作法も知らず家庭	夫婦	交際の事柄も知らず徒らに ダメツチとなつて果てるのみ。 二、 青年に
31	交際の事柄も知らず徒らに	ダメツチ	となつて果てるのみ。 二、 青年にして病い出で
32	二、	青年	にして病い出でんか學校は中途にして退學し商家の丁稚なれば
33	二、 青年にして病い出でんか學校は中途にして退學し	商家の丁稚	なれば解雇され發奮すべき好時機 を失しあたらず有爲の青年をして葬り
34	を失しあたらず有爲の	青年	をして葬り去らねばならぬ。 三、 壯年に付て考えて見んか多年の辛苦漸
35	三、	壯年	に付て考えて見んか多年の辛苦漸くなりて妻を娶り家庭を結び
36	三、 壯年に付て考えて見んか多年の辛苦漸くなりて	妻	を娶り家庭を結び之より大いに努力せんとす るの際斯る病に犯されたならば?
37	壯年に付て考えて見んか多年の辛苦漸くなりて妻を娶り	家庭	を結び之より大いに努力せんとす るの際斯る病に犯されたならば?親の嘆き
38	る病に犯されたならば?親の嘆きは如何ぞや。又最愛の	妻子	にも別れて仕舞はねばなるまい。 四、 年寄りは功成りて最早用なき物なれ
39	四、	年寄り	は功成りて最早用なき物なれば死んでも宜しい癩病に罹つて
40	き物なれば死んでも宜しい癩病に罹つてもかまはんと云	人	あれど其 れには又相當の理屈があるもので餘命幾何もな 死に恥をかくと云う
41	斯様に考へ來れば	嫁	であらうが舅であらうが老若の別もなく皆悲慘の極であると思ふ。……聊か
42	斯様に考へ來れば嫁であらうが	舅	であらうが老若の別もなく皆悲慘の極であると思ふ。……聊か 重復に渉るが讀
43	斯様に考へ來れば嫁であらうが舅であらうが	老若	の別もなく皆悲慘の極であると思ふ。……聊か 重復に渉るが讀者替むる事勿
44	重復に渉るが讀者替むる事勿れ、	吾れ	をして今一と筆書かしめよ。……東海道は三島の在に一郵便集配人ありき。
45	……東海道は三島の在に	一郵便集配人	ありき。彼れは長男にして一人の弟あり赤貧洗ふが如くさなきだ
46	集配人ありき。	彼れ	は長男にして一人の弟あり赤貧洗ふが如くさなきだに苦しき折から彼の弟
47	集配人ありき。彼れは	長男	にして一人の弟あり赤貧洗ふが如くさなきだに苦しき折から彼の弟は三十 七
48	集配人ありき。彼れは長男にして一人の	弟	あり赤貧洗ふが如くさなきだに苦しき折から彼の弟は三十 七八にして尚獨身で
49	人の弟あり赤貧洗ふが如くさなきだに苦しき折から彼の	弟	は三十 七八にして尚獨身である。最も性質は低能らしく常に兄の厄介者で加う
50	七八にして尚獨身である。最も性質は低能らしく常に	兄	の厄介者で加うに癩病であつた故兄の困憊 は一方ならず、女房の恩愛にから
51	は低能らしく常に兄の厄介者で加うに癩病であつた故	兄	の困憊 は一方ならず、女房の恩愛にかられて人道に反くとは知りつゝも血肉を
52	は一方ならず、	女房	の恩愛にかられて人道に反くとは知りつゝも血肉を分けた弟を殺そと企て
53	恩愛にかられて人道に反くとは知りつゝも血肉を分けた	弟	を殺そと企てた。 或日とある橋上に運れて行きし其れ汝の行く處は此處だと後よ

54	成日とある橋上に連れて行きそれ	汝	の行く處は此處だと後より突き落した。 眞逆様に落されながら彼れは流石に
55	眞逆様に落されながら	彼れ	は流石に命が惜しく人殺しと悲鳴を掲げて逃げを乞た。兄は其れに 驚き憤
56	憤然として色を失ひ駆けより詫びたと。……之れは直接	本人	の云ふ處を其儘である。 二、沼津在に吉太郎と云う少年があつた。母は早
57	二、沼津在に	吉太郎	と云う少年があつた。母は早く世を去り父は年に似合はぬ若い後妻を娶
58	二、沼津在に吉太郎と云う	少年	があつた。母は早く世を去り父は年に似合はぬ若い後妻を娶り後妻 は大抵悪
59	二、沼津在に吉太郎と云う少年があつた。	母	は早く世を去り父は年に似合はぬ若い後妻を娶り後妻 は大抵悪心が多く此人
60	沼津在に吉太郎と云う少年があつた。母は早く世を去り	父	は年に似合はぬ若い後妻を娶り後妻 は大抵悪心が多く此人も其一人であつた
61	少年があつた。母は早く世を去り父は年に似合はぬ若い	後妻	を娶り後妻 は大抵悪心が多く此人も其一人であつた。財産などはないが女
62	た。母は早く世を去り父は年に似合はぬ若い後妻を娶り	後妻	は大抵悪心が多く此人も其一人であつた。財産などはないが女心の淺間し
63	は大抵悪心が多く	此人	も其一人であつた。財産などはないが女心の淺間しさをそゝのかして彼
64	も其一人であつた。財産などはないが女心の淺間しさに	夫	をそゝのかして彼 の少年を草津に追やつた。草津と云へば有名な温泉で彼等の
65	の	少年	を草津に追やつた。草津と云へば有名な温泉で彼等の如き貧
66	の少年を草津に追やつた。草津と云へば有名な温泉で	彼等の如き 貧困者	がどうして療養に勵むことを得 ん。少年は幼少なれば他國の空
67	ん。	少年	は幼少なれば他國の空を見るは始めてにして艱る人なく宿るに
68	少年は幼少なれば他國の空を見るは始めてにして頼る	人	なく宿るに金なく只だ泣くばかりなり。 僅かに人の情けによつて野に伏し山に
69	僅かに	人	の情けによつて野に伏し山に寝て故郷え歸て見れば驚くべ
70	山に寝て日を経て故郷え歸て見れば驚くべし。鬼の様な	夫婦	は逸早 くも何方ともなく引越して開くと行先を知る人もなく只大聲をあげて
71	くも何方ともなく引越して開くと行先を	知る人	もなく只大聲をあげて泣くのみ。少年に何んの罪があ らうか。嗚呼悲惨な
72	て開くと行先を知る人もなく只大聲をあげて泣くのみ。	少年	に何んの罪があらうか。嗚呼悲惨なりく彼れは病める爲めなるか。其後數日
73	らうか。嗚呼悲惨なく	彼れ	は病める爲めなるか。其後數日を経て彼等の隠れ家を実留め嚴重にか け合ひ
74	呼悲惨なりく彼れは病める爲めなるか。其後數日を経て	彼等	の隠れ家を実留め嚴重にか け合ひたるに二、 三回人前に對して少年の元え尋
75	け合ひたるに二、 三回人前に對して	少年	の元え尋ね來りて十一文もあらんか、 穴だらけの古足袋をも ち來り一度はつ
76	の爲なるか。少年も	少年	も吾れも恐らく其本人以外知る人はなからん。……少年の臨終の時?あ
77	の爲なるか。少年も吾れも恐らく其	吾れ	も恐らく其本人以外知る人はなからん。……少年の臨終の時?ある祖父の
78	の爲なるか。少年も吾れも恐らく其	本人	以外知る人はなからん。……少年の臨終の時?ある祖父の 葉書きが來た。之
79	の爲なるか。少年も吾れも恐らく其本人以外	知る人	はなからん。……少年の臨終の時?ある祖父の 葉書きが來た。之れを見た
80	少年も吾れも恐らく其本人以外知る人はなからん。……	少年	の臨終の時ある祖父の 葉書きが來た。之れを見た少年の欣喜雀躍生れては
81	本人以外知る人はなからん。……少年の臨終の時ある	祖父	の 葉書きが來た。之れを見た少年の欣喜雀躍生れてはじめて葉書が來たと!
82	葉書きが來た。之れを見た	少年	の欣喜雀躍生れてはじめて葉書が來たと!!! 見る人をして轉た無量の感を
83	た少年の欣喜雀躍生れてはじめて葉書が來たと!!!	見る人	をして轉た無量の感を 起さしめた。今その言にせめて一度汽車の辨當を喰
84	年の生活の一端を窺う事が出来る。其外學識名望ある	人	の 内樂多日蔭物に朽ち果てるのでありまし ゃ。何んぞ恐ろしい事でありま
85	か。一度此病に犯されたなれば概ね斯の如くして遂に	家	は亡 び縁談は破綻となり絶えず家庭に風波の絶間なく親子夫婦親戚兄弟等に至
86	び縁談は破綻となり絶えず	家庭	に風波の絶間なく親子夫婦親戚兄弟等に至る迄互に憎み互に嫌ひ暗室 に閉さ
87	び縁談は破綻となり絶えず家庭に風波の絶間なく	親子	夫婦親戚兄弟等に至る迄互に憎み互に嫌ひ暗室 に閉されて自滅するの外なか
88	び縁談は破綻となり絶えず家庭に風波の絶間なく親子	夫婦	親戚兄弟等に至る迄互に憎み互に嫌ひ暗室 に閉されて自滅するの外なからん
89	縁談は破綻となり絶えず家庭に風波の絶間なく親子夫婦	親戚	兄弟等に至る迄互に憎み互に嫌ひ暗室 に閉されて自滅するの外なからん。爲
90	は破綻となり絶えず家庭に風波の絶間なく親子夫婦親戚	兄弟	等に至る迄互に憎み互に嫌ひ暗室 に閉されて自滅するの外なからん。爲に成
91	かに増したと思ひます。故に此世に	神佛	はなしと云ひ自暴自棄に陥り狂死にする人もあります。 要するに世人是
92	思ひます。故に此世に神佛はなしと云ひ自暴自棄に陥り	狂死にする人	もあります。 要するに世人是を遺傳と云い傳染と云うも論者に
93	要するに	世人	是を遺傳と云い傳染と云うも論者に任ずとして死に角患者の不幸は一
94	要するに世人是を遺傳と云い傳染と云うも	論者	に任ずとして死に角患者の不幸は一家の不幸。引て わ一國の恥となり其の子
95	人は遺傳と云い傳染と云うも論者に任ずとして死に角	患者	の不幸は一家の不幸。引てわ一國の恥となり其の子々孫々に至る迄蛇蝎の如
96	云い傳染と云うも論者に任ずとして死に角患者の不幸は	一家	の不幸。引てわ一國の恥となり其の子々孫々に至る迄蛇蝎の如くに嫌われ穢
97	わ一國の恥となり	其の子々孫々	に至る迄蛇蝎の如くに嫌われ穢多の如くに疎まれる者無慮二萬餘と
98	之れは實に國家の敵である。	人類	の大敵である。……私は吾が半生を告白するに先つて聊か此處 に繪言として
99	之れは實に國家の敵である。人類の大敵である。……	私	は吾が半生を告白するに先つて聊か此處 に繪言として述べ置くものである。
100	れは實に國家の敵である。人類の大敵である。……私は	吾が	半生を告白するに先つて聊か此處 に繪言として述べ置くものである。

音形「字数」の出力結果に前節のような修整をし、図表4のように、登場人物、場面、対象、描写、関連に整理した。⁹⁾ そこからは、図表2のi～ivよりも多種の登場人物、エピソードが現れていること、それらに係っての、ネガティブで過酷な「癩病」観を読み取り得るとの見通しを得た。

そこで、「緒言」パラグラフの多種の登場人物すべてをキーワードとしたKWIC分析を行った。その結果を図表6に示す。¹⁰⁾

図表6からは、次のア)～カ)を読み取ることができる。なお、(L2)等丸括弧内は図表6の行番号である。

- ア) 登場人物の内、「私」(L2)、「吾が」(L100)は告白者自身を指し、「本人」(L56)が、告白者が記すように「本人の云ふ處を其儘」だとしても、それ以外の登場人物は伝聞等によるエピソード中の登場人物である。
- イ) そのエピソード中の登場人物には、「世人」(L4)、「何人」(L10)、「人々」(L24)「人」(L15)、「誰にも」(L18)、「人類」(L98)のように、総称レベルのものがある。
- ウ) また、「患者」(L2)、「ルビドコ九世」(L5)、「(ルビドコ九世)臣下」(L6)、「醫者」(L17)のように、社会的地位や役割を表すものがある。
- エ) くわえて、「青年」(L32)、「壮年」(L35)、「年寄り」(L39)のように、ライフステージを表すものがある。
- オ) さらに、「夫婦」(L30)、「妻」(L36)、「妻子」(L38)、「嫁」(L41)、「舅」(L42)、「長男」(L47)、「弟」(L49)、「兄」(L50)、「女房」(L52)、「母」(L59)、「父」(L60)、「後妻」(L61)、「夫婦」(L70)、「祖父」(L81)、「親子」(L87)、「親戚」(L89)、「一家」(L96)、「其の子々孫々」(L97)のように、家族親族を表すものがある。
- カ) そして、「ルビドコ九世」(L5)、「三島の在に一郵便集配人」(L45)、「吉太郎」(L57)のように、個別の人物に対応した名称がみられる。

ア)～カ)の小括をしておくならば、そこに顕著な特徴は、連番2の告白者である「私」が、伝聞さえ厭わず、多種の登場人物を論^{あべつら}い、しかもそれらが個別<総称の包含関係を有する点である。それを模式的に図表7に示す。

図表7

個別の人物<家族親族<社会的地位/役割<ライフステージ<「人類」等の総称

この、およそヒトについてもれなく論わんばかりの登場人物の動員、はなにをねらったものなのだろうか。図表6の先行文脈/後続文脈にその手がかりがある。キ)～サ)に示す。

- キ)「私」(L1)の後続文脈に「最も嫌いな物」、「私」(L99)の先行文脈に「人類の大敵」(L99)。
- ク)「夫婦」の先行文脈に「鬼の様な」(L30)、「妻子」(L38)の後続文脈に「にも別れて仕

舞はねばなるまい」、「嫁」(L41)、「舅」(L42)の後続文脈に「皆悲惨の極であると思ふ」、「兄」(L50)の後続文脈に「(弟は)厄介者で加うるに癩病であった」、「弟」(L53)の後続文脈に「を殺そと企てた」、「女房」(L52)、「夫」(L64)の後続文脈に「(後妻が) そのかして少年を草津に追やつた」、「兄弟」(L90)の先行文脈に「親子夫婦親戚」、後続文脈に「等に至る迄互に憎み互に嫌い暗室に閉されて自滅するの外なからん」、「一家」(L96)の先行文脈に「兎に角患者の不幸は」、後続文脈に「(一家の)不幸、引てわ一國の恥となり」、「其の子々孫々」(L97)の後続文脈に「に到る迄蛇蝎の如く嫌われ穢多の如くに疎まれる」。

ケ)「青年」(L32)の後続文脈に「學校は中途にして退學し」、「年寄り」(L39)の後続文脈に「死んでも宜しい癩病に罹って」。

コ)「世人」(L4)の後続文脈に「一般から嫌はれて居る」、「何人」(L10)の後続文脈に「も癩病を恐れざるはなく又是程嫌われる物はあるまじ」、「人々」(L24)の先行／後続文脈に「如何程細かに書たとて到底」「(人々に)了解させ得ると云事不可能の事とします」

サ)「ルビドコ九世」の「臣下」(L6)の後続文脈に「大罪を犯すと癩病にかゝるとわ何れが惡しきかと」、「三島の在に一郵便集配人」(L45)を指す「汝」(L54)の先行／後続文脈に「とある橋上に連れて行きそれ」「(汝の)行く先は此處だと後より突き落とした」。

キ)～サ)を直截に受け取るならば、私たちは、告白者である「私」はもとより、各年代にわたり、家族親族は言うに及ばず、佛國王まで持ち出での「癩病」「患者」への嫌悪、敵視、あまつさえ橋から突き落としての殺人場面、と、これでもかと繰り返される、過酷でネガティブな「癩病」観が、世の中のそれであるかの如く、誘導されそうになる。

しかも告白者は、「目撃したる人々の心は如何」(L13)、「否寧ろ戦慄するであろう」(L14: 先行文脈)、「人々に了解させ得ると云事わ不可能の事とします」(L24: 後続文脈)と、「癩病」「患者」に係る「人々」の心理的衝撃、裏腹に他者の了解不可能性、を指摘し、「一郵便集配人」のエピソードの追加にあたっては先んじて、「聊か重複に渉るが讀者に咎むる事勿れ吾をして今一と筆書かしめよ」(L44)と、わざわざ「讀者」を意識した断り書きまで念を入れているのである。

もはや執拗と呼ぶほかはないこうした叙述を含め、実に、あの多種の登場人物の動員は、過酷な、ネガティブな「癩病」観を以てして、私たち読者個々に通常想定し得る批判力すら覆いつくさんがためのものではないか。

この点さらに、「癩病」症状等に係るキーワードで確かめておく。図表8である。¹¹⁾

図表8 連番2「緒言」:「癩病」症状等のKWIC出力結果

行番号	先行文脈	キーワード	後続文脈
1	私の最も嫌いな物が二つある。一つは蛇で一つは	癩病	患者であります。両者は私ばかりでなく世人一般から嫌はれて居る。……或
2	王ルドビコ九世が臣下に向かって云える様大罪を犯すと	癩病	にかゝるとわ何れが惡しきかと。此間に答ふて臣下は異口同音に然り、癩病
3	れが惡しきかと。此間に答ふて臣下は異口同音に然り、	癩病	なりと。勿論ルドビコは宗教に熱心なるが故に宗教的感念より此の問ひを發
4	り之れを答へたのであろう。……世間一般に何人も	癩病	を恐れざるはなく又是程嫌われる物はあるまじ。只癩病と云ふ文字すら忌嫌
5	るまじ。只癩病と云ふ文字すら忌嫌されます。況んや	癩病	と云ふ文字すら忌嫌されます。況んや患者が路傍に徘徊するの時或は
6	斯如くんば病む其れ自身は何んと感じるであらう。他の	病	が路傍に徘徊するの時或は自宅にあつて仕事に従事するの時彼等を自棄した
7	全快の見込みがありません。始めの内こそ美しけれ次第に	重れる	と異つて二年三年で全治する物ではありません五年十年は患が一生涯しく朽ち
8	りません。始めの内こそ美しけれ次第に重れるにつれて	頭髮	につれて頭髮は脱落し唇はたゞ れ腫ははだかり、腫物は皮膚を覆ひ爲に皮
9	めの内こそ美しけれ次第に重れるにつれて	唇	は脱落し唇はたゞ れ腫ははだかり、腫物は皮膚を覆ひ爲に皮膚全體が腐亂し
10	めの内こそ美しけれ次第に重れるにつれて	腫物	はたゞ れ腫ははだかり、腫物は皮膚を覆ひ爲に皮膚全體が腐亂して臭氣ブク
11	れ腫ははだかり、	腫物	ははだかり、腫物は皮膚を覆ひ爲に皮膚全體が腐亂して臭氣ブ
12	れ腫ははだかり、腫物は皮膚を覆ひ爲に	皮膚	は皮膚を覆ひ爲に皮膚全體が腐亂して臭氣ブクとして同席する能はざらし
13	める故に人之を名づけて	癩頭	全體が腐亂して臭氣ブクとして同席する能はざらしめる故に人之を名づけ
14	める故に人之を名づけて	癩頭	と稱す。頭は禿げてランプの如く足は落して腫となるもあり鼻骨は落ち頬肉
15	める故に人之を名づけて	頭	は禿げてランプの如く足は落して腫となるもあり鼻骨は落ち頬肉はそげ、或は
16	に人之を名づけて	足	は落して腫となるもあり鼻骨は落ち頬肉はそげ、或は盲目となり取り返し
17	づけて	骨	となるもあり鼻骨は落ち頬肉はそげ、或は盲目となり取り返しの付かぬ不具
18	ず。頭は禿げてランプの如く足は落して腫となるもあり	鼻骨	は落ち頬肉はそげ、或は盲目となり取り返しの付かぬ不具者となり一
19	頬肉はそげ、或は	盲目	となり取り返しの付かぬ不具者となり一擧げれば杖擧に達なく世界中
20	頬肉はそげ、或は盲目となり取り返しの付かぬ	不具者	となり一擧げれば杖擧に達なく世界中を 駈け??るとも斯る珍物を見出
21	駈け廻るとも斯る	珍物	を見出す事は能はざるべし。其の容貌と云い其の手足と云えざる言葉を見
22	駈け廻るとも斯る	容貌	と云い其の手足と云えざる言葉を見出すに苦しむ。故に人は人三化七と誠に
23	る珍物を見出す事は能はざるべし。其の容貌と云い其の	手足	と云えざる言葉を見出すに苦しむ。故に人は人三化七と誠に適當の譬かと思
24	に苦しむ。故に人は	人三化七	と誠に適當の譬かと思う。……之を醫者に聞くと微菌は内部迄侵入し
25	と誠に適當の譬かと思う。……之を醫者に聞くと微菌は	内部	迄侵入して居ると云ふ。外部の微菌は誰にも知れる通りであるが其れ自身の
26	て居ると云ふ。	外部	の微菌は誰にも知れる通りであるが其れ自身の最も遺憾に堪えないのは麻
27	知れる通りであるが其れ自身の最も遺憾に堪えないのは	麻痺	其れである。知覺脱失する事である。感覺の鈍る事である。時によつて足
28	覺脱失する事である。感覺の鈍る事である。時によつて	足	の一本を切つても大火傷をしても本人は一向平氣で他人から云はれて始めて驚
29	。感覺の鈍る事である。時によつて足の本を切つても	大火傷	をしても本人は一向平氣で他人から云はれて始めて驚くと云事や人參と牛
30	氣で他人から云はれて始めて驚くと云事や人參と牛	喰い分け	がつかぬ人さへある。専門醫でない限りどうして此の患者の狀態が察し
31	る。専門醫でない限りどうして此の	患者	の狀態が察しられようか。如何程細かに畫たとて到底人々に了解させ得ると
32	解させ得ると云事わ不可能の事とします。或る醫者が此	麻痺	と云事にて學理上でなく實地に知りたいて云て居た處風吹き荒ぶ冬の或日
33	がつきさては	患者	の麻痺もと思つたと云。…… 是は單に一例に過ぎない事であるが
34	がつきさては患者の	麻痺	もと思つたと云。…… 是は單に一例に過ぎない事であるが
35	一、少年にして此の	病	出でんか學問は愚か體操作法も知らず家庭夫婦交際の事柄も知らず徒らに
36	二、青年にして	病	い出でんか學校は中途にして退學し商家の丁稚なれば解雇され發遣すべき好
37	る際斯る	病	に犯されたらば兩腕の嘆きは如何ぞや。又最愛の妻子にも別れて仕舞
38	四、年寄りは功成りて最早用なき物なれば	死	んでんか宣しい癩病に罹つてもかまはんと云人あれど其れには又相當の理屈があ
39	年寄り功成りて最早用なき物なれば死んでも宣しい	癩病	に罹つてもかまはんと云人あれど其れには又相當の理屈があるもので餘命幾
40	れには又相當の理屈があるもので餘命幾何もなく	死	に恥をかくと云うは殘念であると云ふ。斯様に考へ來れば嫁であらうが異で
41	ある。最も性質は低能らしく常に兄の厄介者に加うるに	癩病	であつた故兄の困憊は一方ならず、女房の恩愛にかられて人道に反くとは知
42	にかられて人道に反くとは知りつゝも血肉を分けた弟を	殺	そと企てた。或日とある橋上に連れて行きそれ故の行く處は此處だと後より突
43	眞逆様に落されながら彼れは流石に命が惜しく人	殺	しくと悲鳴を擧げて助けを乞ふ。兄は其れに 驚き儼然として色を失ひ駆けよ
44	らうか。嗚呼悲惨なり彼れは	病める	爲めなるか。其後數日を経て彼等の隠れ家を突圍しに け合ひたるに
45	よ。何んと恐ろしい事でありませんか。一度此	病い	に犯されたなれば概ね斯の如くして遂に家は亡び縁談は破綻となり絶えず家
46	に閉されて	自滅	するの外なからん。爲に或は放浪し或は自殺し一層一思ひに死の宣告
47	に閉されて自滅するの外なからん。爲に或は放浪し或は	自殺	し一層一思ひに死の宣告を受けた方が遙かに増したと思ひます。故に此世に
48	の外なからん。爲に或は放浪し或は自殺し一層一思ひに	死	の宣告を受けた方が遙かに増したと思ひます。故に此世に神佛はなしと云ひ自
49	かに増したと思ひます。故に此世に神佛はなしと云ひ	自暴自棄	に陥り狂い死にする人もあります。要するに世人是を遺傳と云い傳染
50	思ひます。故に此世に神佛はなしと云ひ自暴自棄に陥り	狂い死に	する人もあります。要するに世人是を遺傳と云い傳染と云うも論者に
51	人は是を遺傳と云い傳染と云うも論者に任ずとして兎に角	患者	の不幸は一家の不幸、引てわ一國の恥となり其の子々孫々に至る迄蛇蝎の如

図表8の先行/後続文脈からは、シ) ~チ) を読み取ることができる。

シ) 「癩病」「患者」に係って、「私の」「最も嫌いな物」「蛇」(L1)、「大罪を犯す」(L2)、「世間一般に」「何人も」「恐れ」「嫌われる」(L4)、「(癩病の)文字すら」「嫌われる」(L5)と、生理的な忌避が自他を問わず広く染み着いているが如く、いわば社会心理上のネガティブな価値付けから始めている。

ス) そのうえで、まるでズームレンズのように、「患者が」「徘徊するの時」「自宅にあつて」(L6)「目撃したる人々の心は如何ん」(L6、「図表6」L13)と、ローカルな場面設定下での「人々の心」へと焦点距離を移動させている。

セ) L7～L31 までは、「癩病」の諸症状に係って、「全治する物では」なく「一生空しく朽ち」(L7) から始まって、「重れるにつれて」(L8)、「頭髮」(L9)「唇」(L10)「睫」(L11)「皮膚」(L13)「頭」(L15)「足」(L16)「鼻骨」「頬肉」(L18)「内部」(L25)「外部」(L26)と身体部位を列挙し、そこに、「脱落」「たぐれ」(L8)「腫物」「靡亂」(L10)「癩臭」(L14)「禿げ」(L15)「鬘」(L17)「盲目」(L19)「麻痺」(L27)と「取返しの付かぬ」(L19)症状が現れ、結果「不具者」(L20)「珍物」(L21)「人三化七」を「適當の譬かと思う」(L24)と宣するに及んでいる。

ソ) さらに、焦点距離の移動を用い、「足の一本を切っても」「大火傷をしても」「平気」(L29)、「人蔘と牛蒡の」「喰い分けがつかぬ」(L30)、「少年」「青年」「年寄り」と、ローカルな場面設定を重ねている。

タ) くわえて、「死に恥」(L40)「人殺し」(L43)「自滅」(L46)「自殺」(L47)「自暴自棄」(L49)「狂い死に」(L50)と、「癩病」と死を結託させている。

チ) そして今度は、「患者の不幸」→「一家の不幸」→「一國の恥」→「子々孫々」(L51)と、個から国や世代へと一気に焦点距離を拡張している。

シ) ～チ) についてもまた直截に受け取るならば、私たちは、「世間一般」から「人蔘と牛蒡の喰い分け」場面までの、目まぐるしい焦点変化に振り回されながら、入れ替わり立ち替わりインサートされる強い光のように身体部位や諸症状の列挙に曝される。それは、この告白者の採った表現スタイルなのであり、そうした場面設定、部位、症状等がそもそもはこの告白者によって選び抜かれたトピックでありエピソードであることを見失いそうになる。自他共に生理的な忌避感を有するが如く、としか、告白者は言っていないのだが、その自他の全く外に私たちが置くことは難しく、「靡亂」「癩臭」に反応している私たちの五感。「全治」なく重症化し「空しく朽ちる」「一生」も、「人三化七」を「適當の譬」「と思う」のも、死と病いの結託も、告白者なりのストーリーにすぎない、と突き放す傍から、「癩病」「患者」自身による告白ストーリーであればこそその重量を感じないわけにもいかない。そういうこともあったかもしれない、と私たちは記憶し始めている。せめて、個の不幸を「一國の恥」にまで押し上げんとするクレシェンドに論理の飛躍なりを見出したとしてもそれは、そのような記憶の素地が形作られつつある中であって、局所的な批判に留まるものかもしれない。¹²⁾

執拗な叙述と多種の登場人物の動員が、過酷な、ネガティブな「癩病」観を以てして、私たちの批判力を覆いつくそうとしているのではないか。

図表6までの分析から、私たちは既にこの問いを立てておいた。図表8の分析からは、その「執拗な叙述と多種の登場人物の動員」にくわえ、焦点変化を伴う場面設定や、部位、症状等を生理的な忌避感を与えつつ列挙していくスタイルが、全治なく重症化し「人三化七」「死」と隣り合わせの一生といった、それ自体批判されるべき飛躍をはらんだしかしあたかも一本の糸の如きストーリーを作り、それが私たちの批判力を覆いつくさんとするものであることが示唆さ

れた。

本稿のこの知見は、限られたケースの一部の分析によるものであり、したがって、「はじめに」で立てた問い、すなわち「『癩患者の告白』所収の告白はあるスタイル／ストーリーに係留されたものでもあるのではないか」への結論は慎まねばならない。

ただ、備忘のためにも、この問いを別角度から言い直しておくことは今後の分析のためにも有用であろう。

『癩患者の告白』冒頭の内務省衛生局による「凡例」に記された「本書編纂の目的」は次のとおりである。

「患者の発病當時の感想、疾病の隠蔽及治療に對する苦心、社會の患者及血族に對する嫌惡、壓迫、遂に故郷を去りて遍歴するに到る經緯、浮浪徘徊に依りて病毒撒布の狀況、收容當時の心理狀態、將來の希望等を窺知し一は以て向後の改善適應に關する參考資料たらしめ一は以て癩に對する正當なる理解と同＜情＞とを喚起するの具たらしめんとするに在り」(①、172。<>内は旧字体のフォントがないもの)

『癩患者の告白』が、「癩に對する正當なる理解と同＜情＞とを喚起するの具たらしめんと」患者の「感想」「苦心」「嫌惡」「壓迫」「遍歴」「浮浪徘徊」「病毒撒布」「心理狀態」「希望」を「徴」したものであったことがわかる。ここで言う「正當なる理解と同＜情＞」の「正當なる」とは、明らかに『癩患者の告白』を「徴し」た側の価値判断である。それと、本稿で示唆された上述のようなスタイル／ストーリーとの関係をどのように解すべきなのか。

こうした問いに直接答え得る『癩患者の告白』作成過程に係る行政等資料の殆ど残されていない。辛うじて可能なのは、『癩患者の告白』所収の告白の分析を1ケースずつ積み上げていくことである。本稿は、冒頭に述べたように、そのベースとなるもうひとつの読解準備作業の試みであった。

- 1) この他に、国の隔離政策に先立つ宗教者による療養施設もあった。(②、「3.『癩患者の告白』前後の関連調査の特徴」)
- 2) 連番5には年齢記載がない。それを除いた11名の年齢の平均値である。
- 3) KJ法やグラウンデッド・セオリーが典例であり、その改良の提案も少なくない。
- 4) グレイザー&ストラウス、後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見：調査からいかに理論を生み出すか』、新曜社、2010年、13刷、49-50頁。Glaser, B.G./Strauss, A.L., The Discovery of Grounded Theory : strategies for qualitative research, Aldine Transaction, 3rd paper back printing, 2008, pp.35-37
- 5) 本稿では、『癩患者の告白』が大正期に書かれ旧字体が多用されていることから、国立国語研究所小木曾智信が著作権を有するプログラム「近代茶まめ」を用いる。「近代茶まめ」は「近代文語」を扱うUniDic辞書と形態素解析器Chasen、Mecabによる「形態素解析を行うのを補助するためのソフトウェア」である。小木曾智信「近代文語 UniDic

Windows 版パッケージ：「近代茶まめ」使用説明書」、2009年8月、2頁。なお現在では、<http://ninjal.ac.jp> の「コーパス・データベース」→「ツール」→「UniDic」に、「現代書き言葉 UniDic」「現代話し言葉 UniDic」「古文用 UniDicS」が公開されている。なお、本稿で使用、引用するインターネット上のプログラム、文書の閲覧日はすべて2017年10月10日である。

- 6) KWIC Finder ver3.30 Copyright (C) 2000-2014, hishida, hishida @ bg.mbn.or.jp, <http://estudio.info>。このソフトウェアは、.txt データであればフリーソフトとして使うことができる。
- 7) 図表2の分析では、文字数を数える際、Excel2016の「len」関数を利用した。
- 8) この点は、日本語の拍と関わる。日本語の拍とは日本語のリズムを表す指標で、基本的には、仮名1文字を1拍と数えるが、特殊拍については別の数え方があるとされている。(沖森卓也『日本語全史』、ちくま新書、2017、48-49。中村明『日本語文体論』、岩波学術文庫、2016、p.227、282) すなわち、拗音は前の仮名と2文字で1拍、撥音、促音、長音、二重母音の第二要素は1文字で1拍である。(田中真一「日本語のモーラ、音節、フットと単語長：野球声援のリズム結合と外来語アクセント」『神戸言語学論叢』、2007年12月、pp.207-216。 http://www.lib-kobe-u.ac.jp/Handle_kernel/81001535。望月朝香、鈴木泰博「小説における文体印象解析の試み」、言語処理学会第14年次大会発表論文集、2008年3月、pp.285-288、 http://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2008/pdf_dir/A2-1.pdf) さて、明治大正期の日本語の拍は、外国語の翻訳文体における七五調が、唱歌、軍歌等においても用いられるようになったことから、広くいわばな^なじ^じみの良いリズムになっていたとの指摘もある。(山東功『唱歌と国語——明治近代化の装置』、講談社選書メチエ、2008)『癩患者の告白』の文体に接近する際、拍をポイントにすることの可能性が示唆される。今後の課題である。
- 9) なお、本文中、ふりがなのあるものはその読みに従った。また、傍線や傍点のある個所については、それを除いた原文のみを分析対象とした。「…」や「-」、「！」についても、分析から除いた。小題ならびに小題を目次風に列挙したもの、会話括弧、句読点、「(終)」「(完)」、筆記時の日付と思われる記載も除いた。判読できない文字は■で表中には入れたが、その個所は分析から外した。また、この「出力結果」だけでも1700行を越え紙幅が尽きるので、既述のようにここには掲載しない。
- 10) 登場人物の抽出には、形態素解析出力結果の「品詞」で「名詞」「代名詞」を基本とし、連体修飾語「狂い死にする」+「人」のように、ひとまとまりと解し得るもの等について、筆者が指定した。
- 11) KWIC 分析の性質上、図表8には図表2、6との重複箇所を含む。
- 12) シ) ~チ) から得られたこうした知見は、当該患者の告白文書である『癩患者の告白』が持ち得る「隔離のリアリティ」(②、29-30) について、外からは窺い知れない当事者ならではの諸事情の「実録」に一面化すべきではなく、あるスタイル/ストーリーの下、告白者のコトバといわば撚り合わされたその多面性に注意を払うべきこと、を示唆している。